

編集後記

今月号の特集は“分子標的薬”。ご存知のようにAMDの治療は分子標的薬で劇的に変わった。また、薬剤そのものではなく Drug Delivery の方法にもパラダイムシフトが起きた。それは、眼内注射をその基本としたことだ。眼内注射は、かつては感染症における抗生物質投与や、炎症を抑制するためにステロイドの投与を行うなど、緊急事態への対応が主であったといえる。ところが、抗 VEGF 剤は眼内注射が基本的な投与経路となっている。眼内注射は今日の眼科において標準的な医療となりつつある。

分子標的薬の次に大きな期待が寄せられているのが“遺伝子治療”である。既にアメリカではスパーク・セラピューティクス社が Leber 先天黒内障に対する治療を終え、2018 年より遺伝子治療薬「ラクスターナ (Luxturna)」の販売を開始した。Leber 先天黒内障の一部は RPE65 という遺伝子に変異があり、このためビジュアルサイクルがうまくまわらず、生後より重い視力障害を示す。そこでこの RPE65 をターゲットに遺伝子治療を行い、視力を回復させようとするもの。遺伝子治療は病気の根本を治す治療であるため、経済

合理性の点からも期待されている。何よりも現在の技術では治すことができない失明に至る疾患の治療が行えることは素晴らしい！ 思い返してほしい。20 年前は加齢黄斑変性に対する治療法はまったく存在せず、視力を失う患者になすべがなかったのだ。でも今は抗 VEGF 剤があり治療が可能となってきた。現在、眼科を学んでいるレジデントにとっては当たり前のことだが、我々の世代にとっては画期的なことだ。同じことが遺伝子治療でも起きるだろう。

残念なことは、日本は分子標的薬開発では世界に遅れをとり、すべての抗 VEGF 剤は海外で開発されたものということである。これによって外貨の流出が起き、日本の経済にとってはマイナスとなっている。遺伝子治療においても同じことが起きないように願うものである。幸い日本でも最近アンジェス社に対して初めて重症虚血肢に対する遺伝子治療の認可がおりた。これから新しい時代がやってこようとしている。数年後の『眼科』の特集で“遺伝子治療”が取り上げられる時には日本発の画期的な治療が多数含まれていることを期待している。
(坪田一男・記)

編集：富田剛司・坪田一男・後藤 浩・飯田知弘・雑賀司珠也・門之園一明・石川 均
編集顧問：所 敬・小口芳久・臼井正彦・澤 充・谷原秀信・岸 章治・三村 治・飯島裕幸

「眼科」 第 61 巻 第 4 号 4 月号

2019 年 4 月 5 日発行（毎月 1 回 5 日発行）
定価（本体 2,800 円＋税）

年間講読料金 定価（本体 42,100 円＋税）
〔年間 13 冊（臨時増刊号を含む）の誌代〕
〔年間予約購読者に限り送料無料〕

発行所 金原出版株式会社

発行者 福村直樹

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-31-14

Tel 03 (3811) 7165〔編集室直通〕

Tel 03 (3811) 7184〔営業部直通〕

FAX 03 (3813) 0288

ホームページ <http://www.kanehara-shuppan.co.jp/>

振替口座 00130-1-191269

印刷所 横山印刷株式会社 Tel 03 (3622) 6161

広告申込先 福田商店 Tel 06 (6941) 5600

・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権（送信可能化権を含む）、貸与権、二次的著作物への利用に関する原作者の権利は、金原出版株式会社が保有します。

・JCOPY＜出版者著作権管理機構 委託出版物＞

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（TEL：03-5244-5088, FAX：03-5244-5089, e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。